
永久に

玖琉 時斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久に

【Nコード】

N4786D

【作者名】

玖琉 時斗

【あらすじ】

とある研究施設。彼女は天才で何をするにも抜きん出ている。僕は彼女の助手で、やがて愛し合い、毎日が楽しくて幸せだった。だけどそんな日々は長く続かなかった。彼女が、異種族だったから…。

（前書き）

この話は死ネタが含まれます。

血とか文章で読むのも苦手な方は読まないことを推奨します。
それを了承した上で、お読み下さい。

僕は走っていた。

何故走っているのだろう。

呼吸が浅くなり、息がし辛い。

そのせいで頭が朦朧とし、一瞬理由が分からなくなる。

ああ、そうだ。

逃げているんだ。

背後からする無数の気配と足音から。

何から逃げているのだろう。

それは、押し寄せる暗闇と拘束から。

奴らに捕まれば、苦しんで死ぬか、永遠に暗い暗い箱の中で生かされる。

では、何故逃げているのだろう。

弾む息遣いは近くに二つ。

一つは自分で、もう一つは…。

ふと手に熱を感じる。

掴んでいるのは彼女の手首。

そう、彼女を守るために走っているのだ。

「ねえ、何処まで走るの？」

「…さあ？」

真っ直ぐに視線を向けて尋ねてくる彼女に、僕は肩を竦めて微笑み返した。

その時彼女の背に、小さく置まれた彼女の一部が窮屈そうに収まっているのが見えた。

彼女は異種族だった。

つまり人ではないもの。

この世界では類を見ない、翼が付いていた。

彼女は天才だった。

何をするにも抜きん出ていて、自分の出来と反比例して妬む者もいた。

僕はそんな彼女の助手だった。

同じ研究者として彼女を尊敬し、その優しさから慕っていた。

やがて愛し合い、異種族だと知ってもその気持ちは変わらなかった。

翼があるだけで、彼女が彼女であることは覆らない事実だ。

毎日が楽しくて、幸せだった。

このまま年を取って一生を終える。

そう思っていた。

だが、それは叶わなくなった。

異種族だとばれたのだ。

ちよつとした油断が今の現状を招いた。

思わぬモノを見つけた研究者と、全ての知識を搾り出してから殺そうとする政治力と

異物を排除しようとする警察に彼女は追われることとなった。

彼女は目を閉じ、耳を塞ぎ、部屋に閉じこもって出てこなくなった。

僕はそんな彼女を見ていられなくなって、彼女の腕を引いて闇夜へと飛び出した。

彼女と共にいるために。

僕たちは追っ手を撒いて、ある廃れたビルへと逃げ込んだ。もうすぐ朝になるのか、中は薄暗い程度で、照明がなくなるとも不便はなかった。

階段を登って僕らは屋上へ出た。

少し寒かったが、身体を撫で付ける風が気持ちよかった。

乱れた息を煙草を一本取り出して火をつける。

僕は一息吸ってから彼女を見た。

彼女は翼を大きく広げて、風を受け入れていた。

僕の視線に気付いたのか、真っ直ぐな視線を向け、笑みを浮かべた。そんな彼女の顔が眩しかった。

「ねえ…死のうか？」

僕は話を切り出した。

右手には黒光りする硬く冷たいものが握られている。

「二人で？」

少しの間のと、彼女が切り返す。

彼女の眼は脅えることなく、まっすぐ此方に向けられた。

「そう、一緒に」

「あなたが殺してくれるの？」

「ああ、勿論」

「…嬉しい」

彼女はいつものように微笑んだ。

泣くでも、怒るでもなく。

それは彼女が僕と同じ気持ちでいてくれる証拠。

僕は彼女に銃口を向けた。

「ありがとう…。さよなら」

「サヨナラじゃないさ。僕もすぐ行くから」

「そうね。じゃあ…愛する貴方を待つてるわ」

「ああ…」

僕はふわりと微笑んだ。

彼女も最上の微笑を返す。

それが此処での最後のやりとりとなった。

僕は迷うことなく引き金を引いた。

銃声が木霊し、彼女の身体が仰け反る。

白い服が赤く染まっていく。

傾ぐ直前、一本の光が彼女を射した。

分厚い雲から覗いた太陽の一筋の照明。

そのとき初めて雲のせいで暗かったのだと知った。

もうとつくに朝日が昇っていたのだ。

光に照らされ、翼を広げた彼女は、本物の天使のようだった。

いや、たった今彼女は天使になったのだ。

天への階段を昇って。

彼女の羽は一枚ずつ風に流されて、残された入れ物はただの人となった。

僕は彼女を抱き抱えた。

彼女の顔は目を閉じ、口は暖かく微笑んだままだった。

まるでまだ生きているかのように。

その唇に軽く口づけをする。

僕は自分の頭に銃を突きつけて、微笑んだ。

「お待たせ…」

その言葉を最後に僕は引き金を引いた。

銃声が渴いた空に響き渡る。

二人は折り重なるように永い眠りについた。

もう彼女は苦しむことはない。

彼女は彼女であるまま生き、一生を終えた。

僕たちはこれからずっと一緒。

永久に僕はキミの、キミは僕のモノ。

キミは

僕だけの天使…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4786d/>

永久に

2010年10月10日04時31分発行